

Title	アフシャー朝ナーデル・シャーによるマシュハドの都市開発整備事業
Sub Title	Nāder Shāh's urban development project in Mashhad during Afshārid period.
Author	杉山, 隆一 (Sugiyama, Ryuichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2017
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.1/2 (2017. 7) ,p.33(33)- 66(66)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20170700-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アフシヤール朝ナーデル・シヤールによる マシユハドの都市開発整備事業

杉山隆一

一、はじめに

現在のイラン・イスラーム共和国の北東部に位置する都市マシユハド Mashhad は、一二イマーム・シヤア派（以下、シヤア派と略記）第八代イマーム、レザール Reza' (Ali b. Musa al-Rida) の廟を中心に発展を遂げたことで知られる。このレザールの廟の所在地は元々小村に過ぎなかったが、モンゴル期以降のイラン地域一帯でのサイイド信仰の深化やサファヴィー朝によるシヤア派化政策といった当該の地域における歴史的な宗教性の変遷の結果、都市化のみならず地域の中心地としての発展も徐々に促されていくことになる。そして一八世紀に至り成立したアフシヤール朝始祖のナーデル・シヤール Nadir Shah (在位一七三六―四七年)。以下、ナーデルと略

記）は、先行する遊牧王朝同様に首都を公式に定めることはなかったが、このマシユハドを特に好み、自身の遠征時には代理を配置し、建設事業を多く行わなかった。にしては自身の廟の建設など異例の開発事業を行った。そのため、シヤア派振興策の一環として同都市の整備を行ってきた前王朝とは異なり、この時代にはナーデルが創始した王朝の実質上の支配の中心地としての都市開発・整備事業が展開されていく。そして彼の没後も、後継者たちは王朝の崩壊までこの都市を中心に統治を行った。

イラン地域における都市の成立・発展に関しては、まず自然条件、次に経済的な条件が大きな影響を与えてきた。そして前近代における遊牧政権の下では、これらの条件に加えて政治的な条件も付加されるようになり、主

にこれまで遊牧君主の居住区となる緑豊かな牧地としてのバグBagh(庭園)を抱えた所謂「牧地都市」の形成と、さらにその牧地に建設された君主らの廟が核となつて発展した「墓廟都市」という定義の下に検討が進められてきた。⁽²⁾一方、マシユハドは先述のようにシリア派第八代イマーム、レザーの廟を核として都市の発展を見た点で、こうした都市の形成過程とは異なっている。⁽³⁾但し、マシユハドの都市史の研究は全体として概説の段階に留まつており、⁽⁴⁾専論としてはサファヴィー朝期においてシリア派化政策を進めた王族・貴顕らによる同都市への大規模な庇護政策に関する研究があるに過ぎない。⁽⁵⁾アフシャル朝ナーデル期について、欧米の研究はナーデルのその生い立ちや軍事活動の過程の中で生じた世界戦略が彼にマシユハドの「首都」化を促したと評価するも、⁽⁶⁾当時の都市開発・整備自体については簡潔に言及されるのみである。一方で現地イランの研究は、当時におけるバグやメイダーンの構造や、その存在を根拠としたエスファハーンとの類似性、ナーデル廟の建設に言及するも、⁽⁷⁾事実関係の不十分な指摘に基づく検討に留まつている。ナーデルの行った都市マシユハドの開発・整備事業の全容を把握した上で、その意図を考察した研究は見当

たらない。⁽⁸⁾

本稿では以上のような都市マシユハドの歴史的な発展の経緯や先行研究を踏まえ、アフシャル朝君主ナーデル期における同都市に関し、当時の都市の構成やナーデルによる同都市の開発事業を可能な限り明らかにすると共に、その都市開発の意図と特徴の検討を試みたい。なお、史料としては、先行研究でも重用されている‘*Ālām ānāye Naderī*’⁽⁹⁾をはじめ、現地イランの研究では参照されている‘*Zabīr-e Āle Dāūd & Mojmāl al-tawārīkh*’⁽¹⁰⁾、‘*Mojmāl al-tawārīkh*’⁽¹¹⁾等も併せて使用する。加えて、ナーデルが行ったワクフ寄進の文書も有用であるため参照する。このワクフ文書については、アフシャル朝成立に四年先立つ形で一七三二年六月二四日(一一四五年一月一日A.H.)に作成されたものである。ワクフ財にはマシユハド郊外の村落と市内の多数の店舗が設定され、受益対象にはレザー廟やナーデル自らの廟などが含まれる。⁽¹²⁾ワクフの視点からナーデルによる都市マシユハドの開発・整備事業について興味深い情報を提供するが、欧米や本邦の研究では活用されてこなかった史料である。⁽¹³⁾

二、アフシャール朝期までのマシユハドの発展⁽¹³⁾

はじめに、アフシャール朝期に至るまでのマシユハドの都市としての歴史的な発展、特に地域の宗教性及び王朝の宗教政策の変化によってその規模を拡大してきた過程を簡単に確認しておきたい。イマーム・レザーは八一八年（一〇三A.H.年）に当時のホラーサーンの主要都市のひとつトゥース *Tūs* 近郊のサナーバード *Sanabad* なる小村で死没し、彼の廟はこの地に置かれることになる。その後、ガズナ朝期以降にワクフによる廟の壮麗化、水路 *kariṣ* の建設、周辺への店舗の設置などが行われ、外壁ないし土塁も一一世紀には存在していたと言われ⁽¹⁴⁾、古くから町としての体裁を保つような建設事業が行われていたことは確認できるが、廟と周辺域の飛躍的な発展を促すものではなかった。

イルハン朝及びティムール朝の支配の時代を迎える一三〜一五世紀頃に、イラン地域一帯ではサイイド崇敬が高まりを見せるが、この変化に伴ってレザー廟とその周辺域が徐々に本格的な発展を開始したと考えられる。そのことは、この頃に廟とその周辺域の呼称が現在と同じマシユハドへと変化していったことから読み取れる⁽¹⁵⁾。

イルハン朝期には、ガザン・ハン *Ghazan Khan*（在位一二九五―一三〇四年）が一二九九―一三〇〇年（六九九A.H.年）にレザー廟を受益対象としたワクフを行っている⁽¹⁶⁾。そしてティムール朝期に至ると建設活動も盛んになり、第三代君主シャー・ロフ *Shah Rukh*（在位一四〇九―一四七七年）の妃ゴウハル・シヤード *Gowhar Shad* による廟に隣接する形での自身の名を冠したモスク *Masjed-e Gowhar Shad* 及びサイイドの館 *Dar al-siyade* の建設はよく知られている。さらにシャー・ロフは一四一八年（八二一A.H.年）に参詣時の滞在用にバークとその敷地内に屋敷 *saray* の設営を命じた⁽¹⁸⁾。これがマシユハドのチャハール・バーク *Chahar bagh* のはじまりとされる。そして、同王朝末期には宰相ミール・アリー・シール *Mir 'Alī Shir* によってトゥースから同地への水路の建設も行われた⁽¹⁹⁾。イルハン朝からティムール朝にかけての宗教事情の変化によって、マシユハドはイマーム廟の所在地として支配権力側からの注目がより高まり、王族や貴顕のさらなる庇護の対象と化すことで、都市としての発展が進むことになる。

そしてサファヴィー朝が成立した一六世紀には、同王朝が推進したシーア派化政策により、同廟の重要性は著

しく向上し、王朝支配の宗教的な象徴、さらには同派の信徒の義務であるイマーム廟参詣の目的地として、王族、支配エリートによる廟の壮麗化を図る事業が展開される。廟に関連する主要な建設事業としては、シャー・タフマール・アッバス Shah Tahmasp (在位一五三三―一五三七年)、シャー・アッバス Shah 'Abbas (在位一五八八―一六二九年) による金箔での天蓋 gonbad の装飾、⁽²⁰⁾ シーア派信徒の遺骸を埋葬する附設の墓地の建設⁽²¹⁾ が挙げられる。合わせて、同王朝期にはマシユハドのさらなる都市化を推進する事業も開始された。シャー・タフマール・アッバス期には土塁の再建が行われ、⁽²²⁾ 外壁に囲まれた市街区では、シャー・アッバス期以降に廟を中心に東西に伸びる二つの大通りの建設や、水路の再建、⁽²⁴⁾ さらにワクフによって一〇軒を越える店舗をはじめとした商業施設の整備⁽²⁵⁾ が行われ、参詣地に不可欠な「門前町」的な装いをも与えると同時に地域経済の拠点化をも促す形で都市の整備が行われた。加えてワクフを原資とした多くのシーア派宗教学院 madrese の整備⁽²⁶⁾ や、アーシユラーの哀悼行事も行われるようになった。⁽²⁷⁾ このように同王朝期のマシユハドは、廟自体の開発はもちろんのこと、シーア派の参詣地たる宗教都市としての威容を備えると共に、商業

面では中央アジアからの商人がイラン、アフガニスタン方面に向かう際の経由地のひとつとなり、地域経済の拠点としての機能をも担うようになる。⁽²⁸⁾ また、チャハール・バークの開発も行われ、⁽²⁹⁾ 同バークは地方知事の滞在の場ともなり、地方行政の中心地としての機能をも有した。⁽³⁰⁾

以上のようにマシユハドは、先行して存在したシーア派イマームの廟を中心に、後代になって水利やバークの整備により牧地的な機能が付加されて発展を遂げていったという特色が確認できる。そして、サファヴィー朝期に至って王族・貴顕がシーア派体制堅持のためにレザイ廟と都市マシユハドに対する庇護を積極的に推進することで、都市のシーア派的様相の強化と地域一帯の中心地化が進められた状態で、一八世紀のアフシャール朝期を迎えることになる。

三、ナーデルによるマシユハドの開発・整備事業

マシユハドは一八世紀初頭のサファヴィー朝崩壊期の混乱で戦場と化す。⁽³¹⁾ この混乱の中で登場したナーデルが一七二六年(一一三九 A.H. 年) にマシユハドの支配権を掌握し、以後自身が後に創建する王朝の中心地とすべ

く、この地の開発・整備を試みることになる。以下ではナーデルのマシユハドの開発・整備事業の具体的事例を挙げ、同事業の意図と特徴を検討したい。

(一) 水利と君主の居城

まず、マシユハドの都市の基礎インフラの状況と整備について、都市にとって不可欠な水利と、君主の居城とされたチャハール・バークーグ一帯、この二つにつき考察したい。

(一)―一 マシユハドの水利

先述の通り、マシユハド付近一帯では廟の創建以降数度に渡り水利システムの再建が行われていることから、水の確保に問題のある場所であったことが分かる。サファヴィー朝崩壊期の混乱はマシユハドにも大きな損害をもたらしたが、この際に再度同地の水利インフラも機能不全に陥ったと考えられ、レザー廟では水場係たち *sagqān* がラバニ〇頭を利用して郊外から水を運んでいたほど水の確保に問題を有していた。⁽³²⁾ ナーデルはこうした状況を改善してマシユハドの都市機能を回復させるために、近郊のゴレスターンなる枝村 *mazra'e-ye Go-*

lestan から煉瓦や石で作られた暗渠での二つの水路を建設し、レザー廟及び後述するチャハール・バークーグ、さらには市街地への水供給システムを再建した。この水利設備の建設に一四〇〇トマン *tonan* もの莫大な金額がかけられたことは、⁽³³⁾ マシユハドの都市開発の基礎となる水利施設の再建において、支配権力の主導での大規模な投資による工事が不可欠であったことを物語る。このインフラ復興事業により、マシユハドでは安定した水の供給が可能となり、バークーグを含めた都市域一帯の発展の礎が改めて形成されていく。

(一)―二 チャハール・バークーグ一帯

次に、前近代のイラン地域の都市に共通して存在するバークーグについて検討したい。ティムール朝期にレザー廟の北西に設営されたマシユハドのチャハール・バークーグは、サファヴィー朝期に至るまで王族らの参詣時の滞在場所や地方行政の拠点として利用されていた。アフシャール朝期になると、このバークーグそのものが「王権の本拠 *maqat'e soltanat*」、「王権の館 *dār al-saltane*」、「シャールのチャハール・バークーグ *Chahār bāgh-e shāhī*」⁽³⁴⁾ などと形容され、その生涯の殆どを征服活動に費やしたナーデル

の存命中にはこの地に代理が配置されて統治に関する諸業務を遂行する場として機能し、彼の没後は君主の居城になると同時に、後継争いの舞台ともなった。

チャハール・バークに関しては、ナーデル期及びその死の直後に言及する同時代史料には、残念ながらその内部の構成や建物群に関して断片的な記述しか残されておらず、またバークそのものも現存していない。以上のような制約があるが、ここでは史料中に見える関連する記述を用いて可能な限り同バークの構成を再現してみたい。当時のチャハール・バークは、外壁 *diwār* によって囲ま

れ、複数の門を備えていた。史料中でその名が確認できるのは、厨房門 *Darvāze-ye dafarkhāne*、アーリー・ガープー (の扉) (*dar-e*) *‘Alf-qāpū* の三つである。⁽³⁵⁾ そして外壁によって仕切られたバーク内部には、君主の居城を含め複数の建物が存在した。その中でナーデルによって建設されたものが、史料中でハシュト・ベヘシュト (八天) 宮 *‘emārat-e Hasht behesht* と呼ばれる建物である。⁽³⁶⁾ 一五世紀後半以降タブリーズやヘラートなどイラン地域の主要都市におけるバークには、ひとつの中央の間に八つの部屋が周囲を囲んで連なる形式をもったハシュト・ベヘシ

ュト宮なる同名の建物が建設されている。また、後のサファヴィー朝後期のエスファハーンにおける同名の建物の建設もよく知られている。⁽³⁷⁾ イラン地域における同名の建物の利用法の先例から推測すると、この建物は謁見等に用いられる壮麗な建物であったと考えられる。⁽³⁸⁾

その他のバーク内の建物としては、ドウラト・ハーネ *‘Dowlat-khāne* がある。マシユハドのドウラト・ハーネは、歴代の支配王朝の君主らの参詣・行啓の際の滞在場所として利用され、サファヴィー朝期にもその存在と王族による滞在が確認できる。⁽³⁹⁾ アフシャーール朝期には、軍事遠征に明け暮れたナーデル自身のマシユハドでの滞在場所であり、王族らの平時の住まいとして利用されていた。⁽⁴⁰⁾

ナーデルは一七二六年 (一一三八 A.H. 年) にマシユハドに入った際、この建物の修繕及び床への絨毯の敷き詰めを行っている。⁽⁴¹⁾ 恐らくこの建物はそれまでの混乱で傷んだ状態になっており、自らの滞在場所に相応しい形への整備を行ったのであろう。さらにこの君主の住まいであるドウラト・ハーネの近隣には、後宮の館であるハラム宮 *‘Harām-sarā* が存在していた。⁽⁴²⁾ 加えて史料からは、エリヤース・ハーン宮 *‘emārat-e Elyās khānī* なる建物の存在も確認できる。サファヴィー朝後期にエリヤー

ス・ハーンなる人物のマシユハドのベグレレルベギ職への就任が史料中に見出せるため、⁽⁴³⁾この建物は彼による建設の可能性もあろう。この建物は非常に壮麗な形で建設され、ホール *ḥallī* も兼ね備えており、ハシユト・ベヘシユト宮同様に謁見や儀礼などの場としても使用されていたと思われる。⁽⁴⁴⁾ 実際にナーデル没後の一七五〇年（一一六三A.H.年）、セイエド・ムハンマド *Seyyed Moḥammad* がソレイマーン二世 *Soleymān-e sāni*（在位一七五〇年）として君主位に即位した際、この建物が即位式の会場となつて⁽⁴⁵⁾いる。

そして、チャハール・バークの前には、先に指摘したゴレストーン村からの水を貯める上下二段重ねの貯水槽 *ab-anbār* が設置された。この貯水槽の上部には一四個のノズル *dahne* が取り付けられ、水はそこから建物群の中の複数の溜池 *howzha* を通り、ハシユト・ベヘシユト宮へと引かれ、内部の噴泉 *ḥawā* に用いられた。⁽⁴⁶⁾ さらにその水は暗渠によってマシユハド市街の通りを経て、レザール廟内の広場へと流される構造となつていた。また、貯水槽の下部の水は人々の慈善へと利用された。⁽⁴⁷⁾ 加えて先のエリヤース・ハーン宮のホールの向かいには池 *dayāche* も存在していた。⁽⁴⁸⁾ バーク内部での水をふんだ

んに用いた池、先述の貯水槽、噴水、さらに住民用の貯水槽の存在は、周辺地域において希少である水に満ちた豊饒な空間をバーク内部に作り出し、君主の居城に相応しい威容を与えるものとなつていたのであろう。加えて、バークの水環境の整備は、都市の水利インフラと一体化した形で整備が進められていたことが分かる。

そして、王族の宮殿を有したチャハール・バークに面する形で、メイダーン *maydān* が存在した。マシユハドの市域内には、同メイダーンに先立つ形で別途旧メイダーン *maydān-e qadīm* が市域内に存在しており、後述する通りナーデルのワクフ文書にもその地名が見えるが、現存しておらず、当時の位置は不明である。⁽⁴⁹⁾ 前者のチャハール・バークに面したメイダーンは、サファヴィー朝後期のワクフ文書に同バークの建物の前庭 *jelowkhāne-ye 'emārāte Chahār bāgh* という形で登場し、店舗群もその周辺に整備されており、⁽⁵⁰⁾少なくとも前王朝期にはその存在が確認できる。ナーデル期とその直後の史料中において、同バークのメイダーンは「チャハール・バークのメイダーン *maydān-e Chahār bāgh*」⁽⁵¹⁾ もしくは「ドウラト・ハーンネのメイダーン *maydān-e dowlatkhāne*」などの名称で現れ、後者の事例では、メイダーンはインド

の術語で前庭 *Jowkhan* であるという説明も加筆されており、これより前庭とメイダーンが同一であることが分かる。⁽⁵²⁾ 後述するナーデルのワクフ文書中の「ドウラト・ハーネの門の（ところの）新メイダーン *meydan-e jadid-e darh-e dowlat-khane*」なる記述もドウラト・ハーネの前に新しいメイダーンが設置されているという先の説明を裏付けるものとなろう。⁽⁵³⁾ さらに *'Alam-āra-ye Nāderi* においてこのメイダーンは「ナグシエ・ジャハーン」のメイダーン *meydan-e Naqsh-e jahān* という名で現れる。同史料の記述からは、このメイダーンには先述のアリー・ガーブー及び告時や祝祭の際に音楽を奏でる楽隊演奏所 *naqqare khane* が面していたことが確認できる。⁽⁵⁴⁾ このアリー・ガーブーの扉が、このメイダーンと君主の居住区であるバークをつなぐ役割を果たしていたと考えられる。バークとメイダーンの結びつきは、サファヴィー朝期においてはタブリーズ、ガズヴィーン、エスファハーンでも見られる一般的な現象であったと言われる。⁽⁵⁵⁾ 史料に見えるこれらの点より、マシユハドでは、サファヴィー朝の首都と同様にチャハール・バークとメイダーンが隣接した形で前王朝期には建設されており、アフシヤール朝期にも以前と同じ形を維持し、整備されていた

ことが窺える。

当時のメイダーンの敷地については、約二〇〇〇名の騎兵が入ったという記述が史料に見えるため、⁽⁵⁶⁾ 恐らくはその程度の人員を収容できる広さがあったと推測できる。また、武器の保管や処刑⁽⁵⁷⁾、さらには戦勝を祝う式典の開催や曲芸披露の場所であったことも確認できる。⁽⁵⁸⁾ 加えて詳細は後述するが、ナーデルは自らのワクフによりこのメイダーンの一帯に多数の店舗をワクフ財として設定し、商業機能の整備にも配慮している。⁽⁵⁹⁾ サファヴィー朝からガージャール朝期にかけてのエスファハーンにおける「王のメイダーン」の事例を踏まえれば、当時のマシユハドのこのメイダーンも公式の儀礼、市場・交換等の場となり、支配者の公正さや偉大なる権力を示す都市の象徴として機能していたと言えよう。⁽⁶⁰⁾

また、バークにおいては史料から先述の通り「厨房門」なる門の存在が確認できる。同じ名称を持つ門を有していた前王朝のエスファハーン⁽⁶¹⁾の王宮地区の事例に従えば、この門の周辺に食糧庫、厨房などの調理関連施設が存在したと推測される。⁽⁶²⁾ さらに史料中にはシャアのダフタル・ハーネ *dafatar-khane-ye shahī* の存在が見える⁽⁶³⁾、この建物はその名を冠した先述の「ダフタル・ハーネ

門」の近くにあったと考えるのが自然であろう。

マシユハドにおいてナーデルは、ティムール朝期に遊牧民的な気質に基づいて設営されたチャハール・バードの一角を王宮地区として整備してきたことが以上より窺える。そして、その開発と整備は、前王朝期のエスファハーンをはじめとした首都建設を範としてすでに整備されていたチャハール・バード内部や付随するメイダーンなどを活かしながら、王宮地区としての壮麗さと威厳を付加するための改造を施しつつ進められたと言えよう。

(二) 都市の記憶の改変

— レザー廟の整備と自らの廟の建設 —

サファヴィー朝期のマシユハドは、先に概観した通り王朝が掲げたシリア派の宗教イデオロギーを支える機能を果たすべく、イマーム廟の存在を活かした形で宗教・学術施設、商業インフラの開発が進められた。しかし、ナーデルによるマシユハド開発事業は、都市のさらなる繁栄を目指したと同時に、この都市が帯びるようになってきたシリア派的な性格にもある程度の変容を迫ることになる。ここでは、都市マシユハドがこれまで有してきた記憶をナーデルがどのように改変しようとしていたかに

ついて、レザー廟内ならびに自身の廟双方における建設活動から明らかにしていきたい。

(二) — イマーム・レザー廟の整備

ナーデルは、第三代イマーム、ホセインの受難劇であるタアズイーエの上演や、シリア派信徒のカルバラへの埋葬の禁止といった政策で、シリア派の宗教儀礼を一定程度制限したことも知られる⁽⁶⁴⁾。しかし、レザー廟は当時までにシリア派参詣の目的地として非常に重要なものとなっていたため、ナーデルはその存在をマシユハドの開発に役立てるべく廟の修繕・建設活動を行ったとも指摘される⁽⁶⁵⁾。彼は一七二六年（一一三九AH年）にマシユハドを支配下においた後、廟の新しい塔 goldaste の建設に着手した。さらにその際に、すでに存在していたティムール朝君主シャー・ロフの建設による塔と、宰相ミール・アリー・シールが建てたイーヴァーン Ibrāhīmī という二つの建築物につき、金箔の装飾による修繕も行っている⁽⁶⁶⁾。

その後ナーデルはヘラート遠征を行うが、その際に彼はレザー廟への祈願 *du'a* を行ってから戦闘に立出た⁽⁶⁷⁾。そして一七三二年（一一四三AH年）にヘラートを征

表1：ナーデルのワクフにおけるレザー廟での受益対象
(Anzābīnehzād, et al. (eds.), *Bīst vaqf-nāme az Khorāsān*, pp. 223-224, 226-227.)

①水場 saqqā-khāne (ヘラートの大理石を移設して新造)	
職員	A：水場長 saqqā-bāshī 1名 給金 8 t、水場係 saqqā 1名 給金 6 t B：ラバ引きの水場係 saqqā-ye rābīye-kesh 4名 給金合計 16 t (Bは毎日レザー廟ワクフ地の Bābā Qodrat から水を運搬)
支出	水 夏期5か月間、毎日30 man分を購入し使用 蝋燭 毎晩5 estār分の溶けた獣脂 pīh-e gedākhteを蝋燭に使用 アーシューラー時 参詣者への飲み物配布 材料費 6 t 他、修繕費やラバの交換費等を支出
②ナーデルの両親の墓地(毎日)200 dを支出	
職員	コーラン読誦者 hāfez 2名(給金未記載)
③バーバー・アリー・ベクラ6名の墓地 毎日900 dを支出	
職員	コーラン読誦者 6名、絨毯係 farrāsh 1名(共に給金未記載)
支出	蝋燭、お香焚き(詳細未記載)

※略号：t=tomān, d=dīnār ※estār：重量単位、4ないし4.5 methqālと同等

服したナーデルは、祈願での誓約を実行に移す。まず、ヘラートにおいてシャー・ロフにより再建された城塞 *arḡ* に設置されていた白い石でできた水場を大砲隊長 *tūpchi-bāshī* に命じてレシユハドまで運搬させ、廟の広場 *saīn-e noqaddas* の水場に据え付けた。⁽⁶⁸⁾そして、このレザー廟の水場 *saqqā-khāne* は、ナーデルによる先述のワクフの受益対象のひとつとなり、ワクフに際して水場への水供給システムも整備されることになる。⁽⁷⁰⁾このワクフのレザー廟における受益対象をまとめたものが表1になる。

水場に関する受益対象には、水場長と水場係、水運搬係の給金、同所で毎夜点灯する蝋燭の費用、さらに暑い時期の参詣者の慰撫のために水場で消費する氷の購入とアーシューラーの際の飲料の提供費用が確認できる。

以上のレザー廟内での建設活動からは、廟内ではティムール朝期の建設物を重点的に修繕・付加してきたことが分かる。また、アーシューラー時の慈善のワクフ対象への設定は、ナーデルによるシーア派宗教儀礼への制限があくまで限定的であったことを物語る。

その他、イマーム廟における最も重要な設置物のひとつであるレザーの棺を蓋うザリーフ *zarīf* (格子)につ

いては、新製こそしなかったが、宝石による装飾を施した鍵を備え付けた。加えて廟内においてカンテラ一四台の設置、絹製の絨毯の敷き詰めによる床の装飾も合わせ行っている。⁽⁷¹⁾

さらに、彼はレザー廟内に自身の両親 *Saldeyn*、ならびにナーデルが自らの軍事的な活動を開始した時期に自らがその配下となったバーバー・アリー・ベグ *Bāda 'Alī Beyg* ら六名の墓地も設けた。⁽⁷²⁾ 両親らのレザー廟への埋葬は、シリア派信徒が望むイマーム廟への移葬の習慣に従ったものと言えるだろう。そして、先述の自身のワクフによって、彼らの墓にてコーラン読誦者に朝晩のコーラン読誦を義務付け、給金を収益から支払うよう設定した。

ナーデルのレザー廟への建設活動は、先述の通り都市の参詣地としての側面を強化する狙いもあったと言えよう。加えて史料中にはその建設活動について、歴代諸王朝の君主たちが参詣の記念に足跡となるものを廟に作って残してきたという先例に倣った、という言及がある。⁽⁷³⁾ 偉大なる君主らの先例に倣い彼も廟内での建設活動を行ったが、その際に留意したのは、シリア派の象徴であるこの廟に、自らの支配の象徴となる建設物を建て、廟内

のシリア派の遺産とイランの歴史上の偉大なる君主が残した足跡とをいかに併置するかであったと考えられる。その結果行われたのが、レザー廟内における塔、父祖らの廟の建立、そしてナーデルがその支配・征服活動において手本としたティムールが創建した王朝に関連する建築物の修繕・付加であったと指摘できる。このことは、シリア派の参詣地として多くの信徒が訪れる同廟において、ナーデルに関連する記憶及びティムールとその王朝の後継者であるという彼自身の姿勢、この二つを視覚的に強調し、自身の支配者としての姿勢の明確化を狙うものであったと言えよう。

(二) ナーデル廟の建設と慈善

ナーデルは存命中に自らの廟を二つ建設している。ひとつは自身の故地に近いキャラート *Karāt* に建設されたが、もうひとつはマシユハドのチャハール・バークの脇に建てられたものであり、一七三二―三三年（一四五〇 AH 年）に完成した。⁽⁷⁴⁾ 以下、マシユハドの彼の廟につき、諸史料に見える記述からその構成を可能な限り明らかにしたい。その墓地は広い敷地を有し、その中にレザー廟の天蓋に向かい合う形で二つの天蓋が建設され、ナーデ

表2：ナーデルのワクフにおける自身の廟での受益対象一覧
(Anzābīnehād, et al. (eds.), *Bīst vaqf-nāme az Khorāsān*, pp. 224-225, 227.)

職員	従者 khādem 2名 給金合計 12 t 庭師 bāghbān 2名 給金合計 8 t 告時師 mo'azzen 2名 給金合計 7 t コーラン読誦者 4名 給金合計 24 t 水場係 (1名) 給金合計 150 d (水の運搬) ランプ係 cherāghchī (1名) 給金合計 2 t
支出等	蠟燭 毎朝晩 10 estār 分相当の 4本の蠟燭を点灯 香 琥珀製燭台 fatīle-ye 'anbar のために 1日 100 d を支出 水 夏期 5 か月間、毎日 10 man 分を使用 ランプ 2つの尖塔と墓の扉の所の水場のカンテラ 16台の明かりの油 10 estār 分 金曜晩の慈善 来訪した貧者へのナーン 年間総額 7 t 2000 d 絨毯/金糸織カーテン 1~5年毎に交換し、古いものの売却代金は貧者に分配 ※ワクフ財からの収入が支出を上回った場合、剰余分を貧者に分配

※略号は表1と同じ

ル自身と息子のレザー・ゴリー Rezā Qolī (一七四七年/一一六〇 A.H. 年没) の墓所が設けられていた。⁽⁷⁶⁾ 廟自体は良質の煉瓦と漆喰 khesht va gach によって非常に壮麗な形で建設され、建物の構造としては廟に四つの建物 khāne が連なる形を取り、二つの廊下 rahow、二つのイーヴァーン、二つの扉 darb が存在したと伝えられる。⁽⁷⁷⁾ さらにナーデルは一七四〇年 (一一五三 A.H. 年) の中央アジア遠征で獲得したサマルカンドのティムールの墓石とマドラサの扉を自身の廟に据え付けることを決め、実際にマシユハドまで運搬させている。しかし、実際にはこの墓石と扉はティムールへの敬意から設置されることなく、サマルカンドへと返送された。⁽⁷⁸⁾ 加えて、自身の棺は宝石での装飾を施した三〇〇〇トマンを超える価値を持つ壮麗な鉄製のザリーフにて覆われる予定であった。⁽⁷⁹⁾ 廟の敷地内部には水場が設置され、東側にはイラン北西部マラーゲ Marāḡhe 産の大理石製の門が設置されていたという。⁽⁸⁰⁾

そしてこの廟も、先述のナーデルによるワクフの受益対象に含まれている。表2は受益対象の一覧を示したものである。⁽⁸¹⁾

特筆すべきは庭師への給金の支払いの設定であり、こ

こから敷地の内部にバークも兼ね備えていたと推定される。バークの中に君主の廟を建立する形式は、セルジューク朝期以降にトルコ・モンゴル系の諸王朝の支配者らの埋葬の際に見られるようになると思われる。しかしサファヴィー朝では、同王朝の王族の遺骸についてはイマーム廟であるレザー廟やレザーの妹が眠るイマームザデーであるゴムのマアスーメ廟等への埋葬が一般化し、埋葬スタイルに変化がみられた⁽⁸³⁾。他方、前近代インドの支配者一族は、トルコ・モンゴル系の遊牧王朝の伝統を継承し、バークの内部に廟を建設する形式を採用するケースが多く見られた⁽⁸⁴⁾。そのバークの存在の可能性から、ナ

デル廟はサファヴィー朝以前のトルコ・モンゴル系の遊牧王朝の慣例に従った形式を有していたと推測される。

そして、ナデルのワクフには、自身の廟の管理を担当する従者の給金、廟の維持管理や慈善活動に関する費用の支出の指定も含まれ、先述の庭師の他、告時師やコラン読誦者といった他の廟でも見られる職員の給金の支払いが規定された。また、廟の内部に関しては、蠟燭、香の費用、及び絨毯、扉用のカーテンの交換費用の支出も定められた。加えて、廟での毎週金曜の貧者に対するナーンの配布、暑い時期に消費する水の購入、さらに廟

の廊下やイーヴァーン等に敷く絨毯、カーテンについては一〜五年で交換の上、古いものは売却してその収入を貧者に分配するといった、廟を貧者・参詣者への慈善の舞台として機能させる規定も見られた。

一四世紀以降の前近代イラン地域のスンナ派王朝の君主が、自らの廟を宗教学院、病院などを含んだ宗教慈善複合体として建設し、その維持のためにワクフ制度を用いた事例が確認されている。イルハン朝のガザン・ハンやオルジェイトの廟はその最たるものであろう⁽⁸⁵⁾。ナデル廟の建設は、上述の通りワクフによって慈善的な機能が付与されている点では、彼ら先王の伝統を踏襲したものとと言えるが、慈善面ではその規模が比較的小さく、宗教学院などの学術施設が皆無な点で相違も見える。後者に関しては、前王朝期に勢力を振るったシーア派ウラマ⁽⁸⁶⁾への抑圧⁽⁸⁷⁾が関係していると考えられる。

このナデル廟の建設の意図としては、遊牧政権の伝統に則ったバークを備えた自らとその後継者の廟をレザー廟と同等の規模で建設し、マシユハドにシーア派イマームの権威に比肩する形で自らの記憶を刻み込もうとしたものであったと言える。さらに、ナデルは廟でのコラン読誦のような聖性の演出や一定程度の慈善をワ

クフによって永続的に実施されるよう手配し、被葬者となるナーデルが公正かつ慈愛溢れる人物であったという印象を都市民たちに未来永劫に渡って与えることで、自ら及びその没後に続くと考えていた支配王朝としてのアフシャル朝の権威をこのシーア派の参詣都市において先々に渡り誇示しようとしていたと考えられる。

(三) マシユハドにおける商業振興策

一 ワクフを通じて商業インフラへの関与強化
レザー廟周辺での商業施設の整備は先述の通りガズナ朝期には早くも行われているが、その規模は決して大きいものではなかったと思われる。その後、サファヴィー朝のシーア派化政策の中でレザー廟の重要性が高まる中で、先述の通り多数の店舗や隊商宿といった商業インフラの整備も進められ、マシユハドは商業面でも中央アジア、インド方面を結ぶルート上の一大拠点と化していくことになる⁽⁸⁶⁾。

ナーデルもマシユハドの繁栄のために、自身のワクフによってマシユハド市内に総計一七八軒 *hāb* にも及ぶ店舗を購入した上でワクフ財に設定した。加えてワクフ管財人職 *towliyat* を自らの一族が継承するよう定めるこ

とで、ワクフを通じた形での商業インフラへの関与・管理を王族となる自らの後裔による永続化も視野に入れて強化していく。このナーデルの商業インフラのワクフ財化とその整備は、都市の二つの区画に重点を置いて行われた。商業インフラに関するワクフ財をまとめたものが表3である。

商業施設のワクフ設定が行われた場所のひとつには、先述のチャハール・バークのドウラト・ハーネの門に接した新メイダーン周辺がある。このメイダーンには、二九軒の店舗がワクフ財として設定された。店舗の業種としては、同業種の店舗が複数あるケースは食糧雑貨商四軒、パン屋四軒、菓子屋二軒、靴製造業二軒、飼料商二軒である。残りはタバコ商 *tambakū-forūshī* などひとつの業種につき一軒のみとなっており、特定の業種への偏りは見られない。新メイダーンにおける店舗群は、他の店舗群の構成が不明であるという問題も残るが、このメイダーン自体がバークという君主の居城に接するという位置関係や、後述するメイダーンに附属したバーザール *bāzār-e meydān* の一帯に熟練した技術を必要とする業種の店舗がより多くワクフ財に設定されたことを鑑みれば、前王朝のエスファハーンの王のメイダーン一带と同

表3：ワクフ財としての商業施設一覧
 (Anzābīnehād, et al. (eds), *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, pp. 218-222.)

所在地	店舗数 bāb	備考 (店舗の種別、特徴等 ※基本的に店舗数の多い業種順に記載)
①ドウラト・ハーネの門に位置する新メイダーン meydān-e jadīd の店舗群	29	・コーヒーハウス qafvekhāne (門の所に位置、下記店舗とは分けて記載) ・食料雑貨商 baqqālī 4軒、パン屋 khabbāzī 4軒、菓子販売業 ḥalvā'ī 2軒、靴製造業 kafshdūzī 2軒、飼料商 'allāfī 2軒、鞆製造業 sarrājī、垢すり業 dallākī、真鍮道具製造業 davātsājī、帽子製造業 kolāhdūzī、両替商 sarrāfī、陶器商 sefallorūshī、縦糸製造業 faratmālī、香料商 'aṭṭārī、精肉業 qaṣṣabī、タバコ卸売業 tanbākūforūshī、炒り豆業 nokhodbarīzī、搾油業 'aṣṣārī、蠟燭商 shammā'ī、染物業 ṣabbāghī
②旧メイダーン meydān-e qadīm の店舗群	29	・梳綿業 ḥallājī 5軒、パン屋 4軒、菓子屋 3軒、搾油業 2軒、飼料商 2軒、食糧雑貨商 2軒、染物業 2軒、精米業 razzāzī、タバコ卸売業、香料商、蠟燭商、鞆製造業 sarrājī ⁸⁸ 、仕立屋 khayyāfī、捺染業 chītsāzī、ゲリーム織り lavvāfī、陶器商
③チャハール・スーグとパーザールに附属したメイダーン chahār sūq va meydān-e bāzār の店舗群	120	・チャハール・スーグ 12軒 (業種は未記載) 内訳：名称未記載の建物の上部の部屋 ḥojre 8軒 同スーグの角の箇所 4軒 ・その他の店舗 鞆製造業 23軒、アラブ服縫製業 'arabidūzī 10軒、ろくろ業 kharrāfī 10軒、帽子製造業 9軒、タイル商 kāshīforūshī 6軒、手桶縫製業 dalvdūzī 6軒、皮革縫製業 charmdūzī 6軒、靴製造業 3軒、ブーツ製造業 khoffāfī 3軒、香料商 2軒、仕立屋 2軒、梳綿業 3軒、古道具屋兼針造り semsārī va sūzangārī 2軒、ゲリーム織り 2軒、蹄鉄製造業 na'lchegarī、箱製造業 sandūgsāzī、組紐造り 'alaqebandī、荷鞆製造業 pālāndūzī、木材商 chūbforūshī、銅細工業 mesgarī 2軒、鍛冶業 ḥaddādī、鋸造り arregarī、鋳物造り rīkhtegarī ・他業種未記載の店舗計 12軒

じく、バークに滞在する王族の生活を支えるため商業空間であつたと推測できる⁽⁸⁹⁾。そして、ナーデルによるその店舗群のワクフ財化は、こうした重要性を持つ場所に位置する商業インフラへの王権による管理の強化を意図するものであつたと考えられる。

そして、この新メイダーン周辺のワクフ財としての店舗の中で異彩を放つのは、コーヒーハウス qahvehkhane である。コーヒーハウスは、イラン地域にコーヒーが到来したと言われる一七世紀初頭以降、主要都市に建設されている。エスファハーンでも一七世紀初頭には王のメイダーンにこの施設が建設されていた。初期のコーヒーハウスは男娼の存在などいかがわしい場所としても知られたが、後に規制される一方で、知識人、芸術家、高官らが集う文化的な場としての役割をも果たし、情報交換の場として賑わつただけでなく、ウラマーの演説・説教や、『王書 *Shahname*』をはじめとした詩や歴史講話が語られる場としても発展した⁽⁹⁰⁾。そして時には君主自らコーヒーハウスに足を運び、客との会話を楽しみ、さらには外国からの使節との会見を行うこともあつたとい⁽⁹¹⁾う。ホラーサン地域にもコーヒーは一七世紀末には到来して⁽⁹²⁾おり、同時期にはすでにマシユハドにおけるコー

ヒーハウスの存在も伝えられ、文書史料中にもワクフ財としての存在が確認できる⁽⁹³⁾。そしてナーデルも、前王朝の首都エスファハーンのメイダーンと同様に、マシユハドのチャハール・バークに併設した新メイダーンにおいてコーヒーハウスをワクフ財に設定している。このコーヒーハウスはワクフ文書において同バークのメイダーンの店舗群 *dakākin* の中でその他の店舗とは独立した形で記載されていることから、この施設はメイダーン一帯のワクフ財の店舗の中で特別な存在であつたと言えよう⁽⁹⁴⁾。ナーデルによるコーヒーハウスのワクフ財への設定と整備は、彼が先行するサファヴィー朝後期にコーヒーハウスが有していた文化的な機能を理解しており、その存在によってメイダーン一帯における人の往来の活性化による繁栄を期待したのみならず、マシユハドの都市文化の発展を上から促す意向も有していたことを示すものであろう。

その他ナーデルのワクフ財として多数の商業施設が置かれた場所としては、先述の旧メイダーンがある。この旧メイダーンには二九軒の店舗がワクフ財として設定されて⁽⁹⁵⁾いる。この二九軒は恐らくメイダーンに面した形での店舗であつたと考えられる。ワクフ財としての店舗の

業種については、パン屋、菓子屋、食料雑貨商など比較的日常生活に直結したものが多くと言える。

そして、さらにこのメイダーンには上記の店舗群の他に、メイダーンに付属したバーザールに一〇八軒、その近郊に位置したと思われるチャハール・スーグ *Chahar Saig* (四辻のバーザール) に一二軒、合計一二〇軒にも及ぶ多数の店舗がワクフ財として設定されている。ナーデルのワクフによるマシユハドにおける店舗・商業インフラの設定は、一二〇軒という数が示す通りこの地域一帯に最も集中して行われている。前者におけるワクフ財の店舗の種類については、鞍製造業の二三軒を筆頭に、アラブ服縫製業、ろくろ業が共に一〇軒など、特定の業種への偏りが見られる。さらに文書中にてこれらのワクフ財の店舗の位置関係を説明する際に、「銅細工師たちのバーザール *bāzār-e mesgāran*」「鍛冶屋のバーザール *bāzār-e haddād*」とった記述が見えることから、旧メイダーンのバーザール一帯は専門店街であったと考えられよう。⁽⁹⁷⁾ 店舗群の業種の偏りとその専門性の高さから想起するに、恐らく当時のマシユハドにおいては、同じく新旧のメイダーンを持つエスファハーンと同様、この旧メイダーンの周辺域が職人が集う真の市場としての重要

性を持つていた場所なのであろう。⁽⁹⁸⁾ ナーデルは恐らく以前から専門店街となっていたこの一帯をも商業地区として重視し、その店舗の一部をワクフ財化して関与と管理を強めることで、支配権力の主導による都市の商業的な繁栄を目指したと考えられる。

ナーデル期のマシユハドについては、欧人商人がブラ、バルフ、インドなど各地から人が集まり、そのバーザールは大きく、物資に満ち溢れていたとの記録を残している。⁽⁹⁹⁾ こうした繁栄には、彼自身のワクフによる商業インフラへの関与・管理強化が一役買っていたことは想像に難くない。そして、こうした店舗群等からなるワクフ財からの利益が還流されたのは、上述通りレザー廟、そして同廟に埋葬されたナーデルの父祖らの墓、そして彼自身の廟であり、運営・維持管理の財源の恒久的な確保がワクフによって保障されるようになっていた。このワクフは、都市マシユハドの商業的な繁栄を、レザー廟におけるシーア派信仰の一定程度の保証、及び新たな王朝の支配者とその一族らの死後の聖化と権威の構築に強く永続的に結びつけることを狙ったものであったと言えよう。

(四) 都市マシユハドへの移住政策

—アルメニア人の事例から—

ナーデルはその軍事遠征の中で、領地の各地から多数の部族民の徴発や強制移住を行ったことで知られる。特に領地の西部地域一帯を拠点としていた多数の部族をホラーサーン一帯の各地に強制移住させ、辺境防衛や農作業などに従事させた⁽⁹⁹⁾。その中で都市マシユハドの市域内に強制的に移住させられたのが、アルメニア人とユダヤ教徒である。以下、その事情がある程度把握できるアルメニア人の移住の経緯を追い、その背景につき検討したい⁽¹⁰⁰⁾。

アルメニア人に関しては、サファヴィー朝期におけるイラン各地への強制移住が知られている。最も有名なものは一七世紀初頭シャー・アッバース期におけるアゼルバイジャンからエスファハーンの新ジョルフアー地区への強制移住であり、その後彼らがこの都市を中心に世界的な商業ネットワークを構築し、王朝の経済的な繁栄の一端を担う役割を果たした。また彼らは当時ハマダーン、アラーク近郊、ギーラーンとマーザンダラーン、ガズヴィーン、シーラーズ等でも共同体を形成していた⁽¹⁰¹⁾。

マシユハドではサファヴィー朝期までにアルメニア人

が共同体を形成することはなかった。しかし、ナーデルは一七三四年（一一四七A.H.年）のアゼルバイジャン方面への軍事遠征の際に、地域の多数の住民・部族を徴発し、同地一帯に暮らすアルメニア人の家族一〇〇〇戸に対してマシユハドへの強制移住を命じた。ナーデルは彼らの強制移住にあたり、エスファハーンの新ジョルフアーを手本とし、市内の下通り *Khiyābān-e-seft* の一角に居住区を設け、この地に家屋のみならず、キリスト教信仰を保証するための教会も建設し、彼らを住ませた⁽¹⁰²⁾。このことからナーデルはマシユハドにもサファヴィー朝後期のエスファハーンにおける新ジョルフアーと同様のアルメニア人居住区の建設を意図していたと言える。マシユハドへのアルメニア人の移住と居住区の建設も、バグの事例と同様に、エスファハーンに類似した形でのマシユハド開発を推進するものであったと言える⁽¹⁰³⁾。

しかし、マシユハドに居を構えたアルメニア人たちの居住区一帯は、その後周囲の街区とは異質な様相を呈していく。彼らの信仰を保証するために建設された教会の周辺では、さらなる偶像寺院 *bot-khāne*（教会）や、酒場群 *khonkhanehā va sharbakhanehā* までもが立ち並び、楽器や歌手による音楽の演奏、男女の姦通 *zand-ye*

mofisane-ye mard va zan が行われ、さらには無情な臣民の不正、スーフイーによる不誠実な行動などが見られるようになり、イスラーム的(105)な公正さと倫理感に欠けた治安の良くない歓楽街と化していく。恐らくこの一帯はアルメニア人の居住により、周辺とは異なった形で発展を遂げ、地元住民のみならず長旅を経てマシユハドを訪れた多数の参詣者らにとつての非日常的な歓楽の場へと変貌していったと考えられる(106)。

四、おわりに

以上、ナーデルによるマシユハドの開発事業につき、具体例を挙げながらその意図について検討してきた。本稿で明らかにしてきた点について改めてここで整理したい。

イマーム・レザー廟が所在した一帯は、イラン地域における一四世紀以降のサイド崇敬の深化の中でマシユハドの名を冠して都市開発が進められ、サファヴィー朝期のシール派化政策により発展していった。そして、一八世紀に新たなる支配者として登場したナーデルは、上記のような宗教的な潮流の変化の中で発展してきた都市マシユハドを支配の中心地に定める。そのナーデルによ

る都市マシユハド開発政策の特徴としてまず指摘できるのは、この都市の開発事業がサファヴィー朝の首都開発、特にエスファハーンにおける開発・建設事業に基づき展開されている点である。先行研究では簡潔かつ不十分な指摘に留まるその類似性の具体的諸相については、まず前王朝期までにエスファハーンの王宮地区一帯と類似した構造を有するようになっていたと考えられるチャハール・バーク一帯に関し、ナーデルはその構造を維持した形で開発・整備を進め、さらに市街地ではワクフによる新旧二つのメイダーンにおける商業インフラへの関与強化と整備、そしてアルメニア人の市内への移住と街区建設等を行ってきたことが指摘できる。これよりナーデルは、前王朝以来マシユハドが有していたエスファハーンの王宮地区に似た構造を活かした形で都市の整備事業を進め、サファヴィー朝の首都開発の伝統を受け継ぐことで、マシユハドの繁栄と内外に対する自らの権威の誇示を目指していたことが窺える。

加えて彼はマシユハドの開発に際して、レザー廟内部の建設・修復も進めた。この事業はマシユハドが維持してきたシール派の伝統を尊重する姿勢を示すものでありながら、実際には廟内においてティムール朝に関連する

遺産の修復や自身の父母の廟の設置により、レザー廟というシリア派の象徴の中でナーデル自身と自らが征服活動の手下とした王朝の記憶の強調を試みていた。加えて、レザー廟にも比肩する威容を備えた自らとその子孫らの廟を遊牧王朝の伝統に則った形で建設し、この都市に自らの記憶をさらに強く刻み込もうとした。そして、これら二つの廟を受益対象に慈善事業も含んだワクフを設定し、支配の中心たる都市の象徴としての両廟の永続的な管理にも配慮することで、マシユハドにおけるシリア派と、自身が範とするティムール朝、そしてナーデル自らの記憶の恒久的な維持を意図したのである。

以上から、ナーデルによるマシユハドの開発事業は、この都市がそれまでに培ってきたシリア派の伝統の中において、ティムール朝の遺産を強調し、サファヴィー朝後期における首都エスファハーンの建設計画を追従することで、過去のイラン地域における支配王朝の伝統を重視し再現する形を取るものであった。そしてこの支配の象徴となる都市に、さらに自らの廟の建設等によって自身の記憶を刻み込むことで、イラン地域が過去に歩んできた諸王朝の歴史や宗教的な伝統の上に自らの足跡を位置づけ、自身そしてその後継者たちが維持するであろう

王朝の権威の確立と永続化を目指したものであったと評価できよう。

最後に、自身とその一門の記憶をマシユハドに刻み込もうとしたナーデルの思惑は、自らの没後すぐに脆くも崩れ去った点を指摘しておきたい。ナーデル自身は先述の通り、その死後に自らの廟内部の棺の安置場所をザリーフで覆う予定を立てていた。しかし、このザリーフは実際にナーデルの死直後の後継者であるアリー・シャー 'Alī Shāh (在位一七四七—四八年／一一六〇—六一 AH. 年) の統治期にナーデル廟に設置されることはなく、レザー廟にワクフされて設置されることになり、ソレイマーン二世の治世にこの決定が実行されることになる⁽¹⁰⁸⁾。そして、アリー・シャーもレザー廟の北側に壮麗な自身の廟の建設を試みたが、没後にその遺志は果たされることなく、彼の遺骸は同廟附設の墓地となっていたガトルガーフ *qutubān* 地区へと埋葬されてしまう⁽¹⁰⁹⁾。ナーデルの暗殺直後に外部勢力も加わる形で進んだ政治的混乱の中で、彼がマシユハドに残そうとした自らとその一門の記憶は、後継者として名乗りを上げた自らの子や孫らにとって、すぐに利用価値の乏しいものと化していく。

そして、ガージャール朝成立後の一八〇四—〇五年（一二一九AH年）に、このナーデル廟は完全に破壊され、⁽¹⁰⁾さらにチャハール・バークも一八三四年（一二五〇AH年）頃には荒廢し、街区へと転換されたことが指摘されている。⁽¹¹⁾一九世紀にはナーデル期のマシユハドに支配の中心地としての威容を与えていたバークと自らの廟がこの都市から消え去り、ナーデル自身の記憶もマシユハドから一掃される。

しかし、その後ナーデル廟は一九一七年にガヴァーモツサルタネ Qavam al-Saltane によりマシユハドの市街地に再建されることになる。さらに一九六三年には歴史遺産協会 Anjoman-e asār-e meli により改修され、現在ではナーデルの巨大な像が置かれると共に、博物館も併設されている。こうした近現代におけるナーデル廟の再建事業は、イラン国民国家の形成に向けての歴史の再構築の中で、ナーデルの記憶が改めて必要とされる事態に直面したがゆえのことであろう。

註

(1) 前近代イラン地域を支配した遊牧王朝では、多くの場合遊牧的な慣習に従い固定的な首都を有さず、移動を続

ける君主の滞在している場所が事実上の首都であった。同地域におけるこうした遊牧王朝と首都の関係については、後藤裕加子「サファヴィー朝後期のシャーの移動と『統治の都』」『人文論究』六四巻二号、二〇一四年、二九—三一頁にて先行研究における問題の所在が簡潔にまとめられている。ナーデルはマシユハド、及び自身のもうひとつの墓地の建設地であるキャラクターを中心としたホラーサン地域を自身の支配の中心地として定める意向を有していたが、特定の都市を首都とすることなく、先行する遊牧王朝の君主の慣習に従い、自らがいる場所、すなわち自らの遠征中における軍営地を首都であると見なしていた。こうしたナーデルの遊牧の心性と首都に関する考え方の考察としては、Tucker, Ernest, S., *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, Gainesville: University Press of Florida, 2006, pp. 68-72 を参照(〇二五)。

(2) 羽田正「牧地都市と墓廟都市—東方イスラーム世界における遊牧政権と都市建設—」『東洋史研究』四九巻一号、一九九〇年、一一—一九頁。

(3) マシユハドと同様に、地域における宗教性のあり方の変化が、聖廟の政治的重要性を向上させ、廟一帯の都市化を促した土地としては、一一世紀に「発見」された「アリー廟」を有する現アフガニスタン北部のマザール・シャリーフ Mazar-e Sharif を指摘できる。この地はサイイド信仰の深まりの中で周辺の都市化が促され、ついに旧来の地域の中心都市だったバルフ Balkh を凌駕していく (McChesney, R. D., *Waqf in Central Asia: four hun-*

ded years in the history of a Muslim shrine 1480-1889, Princeton: Princeton University Press, 1991)。

- (4) プンネハットの概説的な通史として Seyyedī, Mehdi, *Tārīkh-e shāhre Mashhad*, Tehrān: Enteshārāte Jamī, 1378Kh. がある。また、ホナーサーンに関する事典 Ojāredī, Azīz Allāh, *Farhang-e Khorsān*, Mashhad: Enteshārāte Ojāredī, 7 vols, 1381Kh. の一巻目が都市プンネハットの歴史と現在を扱っている。但し、後者には典故が付なれていないため、利用には注意が必要である。

- (5) サファヴィー朝初期の都市マシユハットにめぐる専論として、守川知子「サファヴィー朝支配下の聖地マシユハット—16世紀イランにおけるシーア派都市の変容—」『史林』八〇巻二号、一九九七年、一四一頁、Farhat, May, Shi'i Piety and Dynastic Legitimacy: Mashhad under the Early Safavid Shāhs, in *Iranian Studies*, 47-2, 2014, pp. 201-216。また同王朝後期のレザー廟へのワクフに関しては、拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」『日本中東学会年報』二六巻二号、二〇一〇年、九九—一二五頁がある。

- (6) マシユハットが重要視された理由について、ロツカート氏はナードルにとって自身が征服を意図していたイラン、中央アジア、インド各地域の中心に位置し、さらにエスファハーンよりもサファヴィー朝の伝統に縛られない土地であったことを述べる (Lockhart, Laurence, *Nadir Shah: A Critical Study Based Mainly upon Contemporary Sources*, London: Luzac & co., 1938, repr. New York: AMS Press

Inc., 1973, p. 197)。⁸⁾ タッカー氏は、註(一)での言及に加え、プンネハット近郊が彼の生誕地であったことを指摘する (Trucker, *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, p. 68)。

- (7) マフシヤール朝期のマシユハットに関する現地イランの研究として、Mokhlesi, Moḥammad 'Alī, "Mashhad-e pāytakht-e Aīshāriyān", in Moḥammad Yūsuf Kiyāni (ed.), *Pāytakht-hāye Irān*, Tehrān: Sāzmān-e mi'rāse farhangī-e keshvar, 1374Kh., pp. 621-648 があるが、当時の同都市についてはパーク及びナードル自身の廟の建設事業の簡潔な指摘を含むのみである。また、マシユハットのチャハール・パークに特化した研究として、Hoseynī, Seyyed Hāshem, "Chahār bāgh-e Mashhad-e Tmmūt dar āyine-ye tārikh", in *Pazūheshhā-ye tārikhī (Elmi-pazūhesh)*, *Dāneshkade-ye adabiyāt va 'olūm-e ensānī, Dāneshgāh-e Esfahān*, 1389 Kh., pp. 73-88 があり、またマフシヤール朝期における同パークについては Seyyedī, Mehdi, *Sinū-ye tārikhī-farhangī-ye shāhre Mashhad*, Tehrān: Āvān, 1382Kh., p. 61 にも簡単な言及がある。前者はマフシヤール朝期の同パークとメイダーンに基づき、本稿でも言及するマシユハットの都市計画のエスファハーンとの類似性を示唆するも、パーク、メイダーンの全容の把握や、当時これらの場が果たした役割の考察が不十分である。後者はパークのみからエスファハーンとの類似性をうく簡単に指摘するに留まつている。

- (8) さらに付言すれば、サファヴィー朝以降のマシユハット

の都市計画は、同時代以降の南インドのシーマ派政権の都市整備に影響を与えたとの指摘もある (Rizvi, Sayyid Athar Abbas, *A Socio-Intellectual History of the Isā'ī Ashārī Shī'īs in India*, vol. 1, Camberra: Ma'rifa Publishing House, 1986, p. 305)。サフマザー朝治下のメソポタミアの都市インフラのシーマ派政権下の都市計画の比較研究を今後著せられよう。

- (9) Marvī, Mohammad Kāzēm, *'Ālām-ārzī-ye Nāderī*, Moḥammad Amīn Rīyāhī (ed.), Tehrān: Nashr-e 'elm, 3 vols, 1374kh. 本史料はナーテルの財務官僚が著した史書で、特に当時の都市社会に関して他の年代記には見られない独自の記述を含む点で利用価値が高い。

- (10) Sollān Hāshem Mirzā, *Zabūr-e Āle Dāwūd*, 'Abd al-Hoseyn Navāī (ed.), Tehrān: Mirās-e maktūb, 1379kh., Mar'ashī, Mirzā Moḥammad Khālī, *Majma' al-tawārīkh*, 'Abbās Eqbāl (ed.), Tehrān: Ketābkhāne-ye tāhūrī va Ketābkhāne-ye sanāī, 1362kh., Golestāne, Abū al-Hoseyn b. Moḥammad Amīn, *Mojmal al-tawārīkh*, Modarres Razavī (ed.), Chāpkhāne-ye sherkate tab'-'e ketāb, n. d.
- (11) 本稿に引用のナーテルのワクフ文書 (レザー廟図書館蔵を参照するにあたっては、その翻刻を掲載する *Anzābīnehād*, Rezā, et al. (eds.), *Bīst vaqfāme az Khawāzān*, Mashhad: Bonyād-e pazhīhesh-hāye eslāmī, 1388kh., pp. 214-31 を利用した。その他翻刻として、Navāī, 'Abd al-Hoseyn (ed.), *Nāder Shāh va bāzmāndagān*, *ham-rāh bā nāmehā-ye salānatī va asnād-e sīyāsī va edārī*, Tehrān: Enteshārāte-zarrīn, 1368kh., pp. 429-442 があるが、この翻刻にはワクフ財に関する記述が欠落している。ガーシヤール朝期に作成された同文書の写しは、*Ketābche-ye Mowqūāte-Āstān-e Qods-e Raza'ī*, Ketābkhāne-ye Āstān-e Qods-e Raza'ī, MS. No. 8557, fols. 45-54 を見せる。また、同王朝末期に作成された同文書の要約を Sadeg al-Dowle, Mirzā Moḥammad Rezā, *Āṣṣar al-Raza'īye*, chap-e sam'ī, 1317A.H., pp. 159-162 に掲載されているが、先の写しと異なる箇所もある。

- (12) ナーテルの征服者・支配者としての経歴を詳細に考察したタッカー氏も、メソポタミアへの施策について簡単に触れている (Tucker, *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, pp. 67-72) が、ワクフの言及は少ない。ナーテルのワクフ文書を考察対象とした現地メソポタミアの研究として、Kadkani, Rezā Naqdī, "Mowqūāte- Nāder Shāh va 'Alī Shāh Aīshār dar Mashhad-e Moqaddas", in *Mirās-e jāvidān*, 46, 1383kh., pp. 84-93² 及び Birjandi, Mohammad Taqī Sālek, "Ashenāī bā Mowqūāte- Nāder Qolī Khān Aīshār", in *Mirās-e jāvidān*, 50, 1394kh., pp. 72-103 の二つがある。前者は後述する後継のアリ・シヤールのワクフも合わせた形で紹介であり、後者はナーテルのワクフ財であった枝村及び管財人職のその後の展開等について検討を試みている。

- (13) Farhat, "Shī'ī Priety and Dynastic Legitimacy: Mashhad under the Early Safavid Shahs", pp. 202-204 及び、サフマザー朝以前のレザー廟・メソポタミアの歴史が簡潔にキ

とめられているが、地域の宗教性の変化の中での廟の重要性の向上にのみ焦点が当てられている。本稿の第二章ではマシエントの都市形成における建設活動の具体例の提示という視点に立ってアフシャール朝までの都市の歴史を簡単に振り返ることにする。

- (14) Farhat, May, *Islamic Piety and Dynastic Legitimacy: The Case of the Shrine of Ali al-Rida in Mashhad (10th-17th Century)*, Unpublished Ph. D. Thesis, Harvard University, 2002, pp. 40-41.
- (15) この外壁ならし土壁についてはヘレン・ハウカルの記述(見よ) (Barthold, W., *An Historical Geography of Iran*, Svat Soucek (tr.), C. E. Bosworth (ed.), New Jersey: Princeton University Press, 1984, p. 105)。
- (16) 廟の地域の名は「初メウサーン Nowghān」と呼ばれていたが、「一四世紀前半期から徐々にメンメントの呼称によって代わられるようになった」(Streck, M., "Mashhad", in P. Beaman et al. (eds.), *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, vol. 6, 1991, p. 714)。
- (17) 本のタイトルは「Mowlavī, Abd al-Hamid, "Farhādgerd", in *Nāme-ye Āstān-e Qods*, 33&34, 1347kh., pp. 120-130を参照せよ。
- (18) Hāfez Abrū, *Zobdat al-Tawārīkh*, Seyyed Kamāl Hāj Seyyed Jawādī (ed.), Tehrān: Sezamāne chāpe- enteshārāt-e vezārat-e farhang va ershād-e eslāmī, Nashr-e mey, 1372 kh., vol. 2, p. 693.
- (19) Samarqandī, Dowlatshāh, *Tazkera al-sho'arā*, Edward Brown (ed.), London: Luzac, 1901, repr. Tehrān: Asāfī, 1382kh., p. 506. 恐らく先の時代の水路とは別に「新たに敷設されたもの」と思われる。
- (20) 前者については、守川知子「サファヴィー朝支配期の聖地マシエント」九頁、後者については Monajem, Jalāl al-Dīn, *Tārīkh-e 'Abbāsī ya Rūzānī-ye Mollā Jalāl*, Seyh Alāh Valīdīyā (ed.), Tehrān: Enteshārāt-e vahīd, 1380 kh., p. 218を参照。
- (21) 拙稿「サファヴィー朝後期におけるイーム・レザー廟のワタフ」一一六七頁。
- (22) Qomnī, Qāzī Ahmad, *Khulāsāt al-tawārīkh*, Ehsan Eshraqī (ed.), Tehrān: Enteshārāt-e Daneshgāh-e Tehrān, vol. 1, 1359kh., p. 609.
- (23) Monshī, Eskandar Beyg, *Tārīkh-e Ālam-ārāye 'Abbāsī*, Iraj Alishār (ed.), 2nd Edition, Tehrān: Enteshārāt-e Amīr-e Kabīr, vol. 2, 1382kh., p. 854.
- (24) *Tārīkh-e Ālam-ārāye 'Abbāsī*, p. 854, *Tārīkh-e 'Abbāsī ya Rūzānī-ye Mollā Jalāl*, p. 328. この水路の水利権のワタフについては、拙稿「サファヴィー朝後期におけるイーム・レザー廟のワタフ」一一頁。
- (25) サファヴィー朝後期のワタフ文書からは、市街地の多数の商業施設がワタフ財となったことが窺える。その中でも大規模なものとして、一六六七年(一〇七八.H)のマズニス・コリー・ハン「Abbās Qolī Khān」によるワタフにおいて、店舗が一〇〇軒規模でワタフ財とされている事例がある(拙稿「サファヴィー朝後期に

おけるイマーム・レザイ廟のワクフ」一二三頁)。

- (26) マシユハドの宗教学院の歴史は「Pasandide, Mahmūd, *Howze-ye 'ahmī-ye Khovāshn : jeld-e avval - Madārese 'ahmī-ye Mashhad*, Mashhad : Bonyāde-pazhūhesh-hāye eslāmī, 1385kh. に詳しく。

- (27) 拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザイ廟のワクフ」一一六頁。

- (28) Burton, A., *The Bukharans : A Dynastic, Diplomatic and Commercial History 1550-1702*, Richmond : Curzon Press, 1997, pp. 399-402. 但し、同書にみれば、中央アジアからの商人は、マシユハドでのシーア派の参詣客を嫌い、同地を経由せずにイラン方面に向かうルートも利用していたことである。

- (29) マクチェスニー氏は、一七世紀に中央アジアからサファヴィー朝のエスファハーンに遣使として向かったモハンマド・バディ *Mohammad Badi* の旅行記「*Muzakkir al-ashhad*」(一六八八—一六九九年(一〇〇〇A.H.年)頃完成)写本はタジキスタン、ウズベキスタンに計二点存在)を利用し、この時代におけるマフラーアンナフルとイラン地域の文化的な差異に関する論考を執筆している。同論考では、この史料の著者がマシユハド滞任時に、当時のホラーサーンのヴァズイールであったミールザイ・サアドアッディーン *Mirzā Saīd al-Dīn* がチャハール・ババグを永遠の天国のような青々とした庭園に作り上げた、と記していることが引用されている (McCheney, R. D., “Barrier of Heterodoxy”? : Rethinking the Ties between

Iran and Central Asia in the Seventeenth Century”, in Charles Melville (ed.), *Safavid Persia : The History and Politics of an Iranian Society*, London and New York : I. B. Tauris, 1996, p. 243)。

- (30) サファヴィー朝の同バグにおける王族の滞在や地方知事の宿営地化については、Hoseyni, “Chahār bāgh-e Mashhad-e Tīmūrī dar āyīne-ye tārikhī”, pp. 77-79 に言及がある。但し、後代の史料を典拠としている箇所もあるため、注意が必要である。

- (31) マシユハドは一七二三年にスイースタン方面から進出したマレク・マフムード *Malek Mahmūd Sīstānī* (一七二六年没) の手に落ちる。ナーデルは一時期彼に帯同するも、のちに袂を分かち、タフマースプ二世と行動を共にして一七二六年にマシユハドを制圧し台頭していく。

- (32) *‘Ālam-dā‘ī-ye Nāderī*, vol. 1, p. 202.

- (33) *‘Ālam-dā‘ī-ye Nāderī*, vol. 1, pp. 202-3.

- (34) *Zabūre-Āle Dāwūd*, p. 98; *Mojmal al-tawārīkh*, p. 45; *Mojmal al-tawārīkh*, p. 106; *‘Ālam-dā‘ī-ye Nāderī*, vol. 1, p. 203. なお、このパートには「王権の本拠」「王権の館」なる形容を付されているが、こうした語は必ずしも同時代の首都に付された語句ではないことから、マシユハドにおける王族の滞在地という程度の意味を表すと考えられる。こうした「首都」を表す表現の問題については、平野豊「ガズヴィーン遷都の年代比定—一六世紀サファヴィー朝文化史再編の視点から」『イスラム世界』四八号、一九九七年、四二頁を参照のこと。

- (35) Jāmi, Mahmūd Hoseynī, *Tārīkh-e Āimadshāhī*, Gho-lamhoseyn Zargarmehzād (ed.), Tehrān : Enteshārāt-e Dāneshgāh-e Tehrān, 1384kh., p. 145.
- (36) *Ālam-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, pp. 202-03, vol. 2, pp. 771-72. なお、同史料の該当箇所を「宮」と訳出した語は複数形 ('enārah) で書かれているが、仮にハシシュト・ペハシチュが複数の建物で構成されているとしても、その個々の建物に関する記述が皆無であるため、ここでは単一の建物であると解釈した。
- (37) タブリーズでは白羊朝のウズン・ハサンが同名の建物を建設している。ヘラートでも名称は不明なるも、パークに同様の構造を持った建物が建設されたことが指摘されている。なお、ムガル朝においても、パークの中の廟建築として同名かつ同様の構成を持つ建物が多く見られる。代表例にはテリーのフマーン廟がある (Colombek, L., "From Tamerlane to the 'Taj Mahal'", in Abbas Daneshvari (ed.), *Essays in Islamic Art and Architecture*, Malibu, Calif.: Undena Publications, 1981, pp. 43-50)。
- (38) サファヴィー朝期エスファハーンのハシシュト・ペハシチュ宮について、シャルダンに謁見の間として用いられていたことを記している (羽田正編著『シャルダン』イェスファハーン誌』研究一七世紀イェスラム圏都市の肖像』東京大学東洋文化研究所第一七輯、一九九六年、一三三―一三六頁)。ウズン・ハサンが建設したハシシュト・ペハシチュ宮について羽田氏は謁見の間としての利用を指摘している (羽田正「牧地都市と墓廟都市―東方イェスラム世界における遊牧政権と都市建設―」二〇頁)。
- (39) サファヴィー朝期の事例では、ドウラト・ハーネは首都のみならず地方にも建設され、首都のものは君主の居住施設兼政府高官の詰所、地方では行宮や冬営時の滞在の「地方離宮」として利用された (平野豊「シャー・タフマースプ一世治下の宮廷とゴム、エスファハーンの戦時協力関係―ハーネ・クーチの都市移送に関する事例研究 (一)」『駿台史学』一〇九号、二〇〇〇年、一〇―一二頁)。同王朝期のマシユハドのドウラト・ハーネはこの地が首都ではなかったことから、平野氏の言う「地方離宮」的なものであったと考えられよう。なお、同王朝期のマシユハドのドウラト・ハーネにおける君主の滞在については、*Tārīkh-e Ālam-ārā-ye Ābbāsī*, vol. 2, p. 611 等に事例が見られる。
- (40) その事例は、Mostowfi, Moḥammad Moḥsen, *Zohdat al-tawārīkh*, Behrūz Gūdarzī (ed.), Tehrān : Bonyād-e nowqūāte-doktore-Mahmūd Aīshār, 1375kh., p. 148, *Ālam-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 103 に記述がある。後者ではナードルがこのパークに入った際、ここで息子たちとの面会等を行い、その翌日に別な箇所に向かったと述べられており、この建物が滞在していたと考へるのが妥当であろう。*Āimadshāhī*, p. 144, 153 等にはパークの中にあつた *darkhāne-ye shāh/darkhāne-ye pādshāh* (君主の館) なる建物の記述があるが、このドウラト・ハーネを指していると考えられる。また、オターレディー氏もガ―ジャー朝以前のチャハール・パーク―帯は王朝の貴

顯や役人たちの住む区画であったと述べる (‘Ojāredī, *Farhang-e Khorrāsān*, vol. 1, p. 204.)。

- (41) *Zohbat al-tawārīkh*, p. 148. また ‘*Ālām-āra-ye Nāderī*, vol. 1, p. 206 にあるチャハール・バークの建物‘ハシエト・シエト宮への絨毯の用意に関する記述は、日付の記載がないがこの際の出来事を指すと考えられる。

- (42) *Almadshāhī*, p. 144.

- (43) サファヴィー朝末期一六九三—一六九八年 (一一〇五—一〇八〇年) の年代記 *Dastīre-shahryārān* の一六九四—一六九五年 (一一〇六AH年) の箇所に当該の記事がある (Nāṣrī, Moḥammad Ebrāhīm, *Dastīre-shahryārān*, Moḥammad Nāder Nāṣrī Mogaddam (ed.), Tehrān: Bonyād-e mowqūfāt-e doktor Mahmūd Aṣhār, 1373kh., p. 80)。註(23)で示したように、サファヴィー朝後期になってマシユハドのバークの開発が進められていることから、本文中の宮殿にその名が冠されている人物はこのエリヤース・ハーンである可能性もある。

- (44) ‘*Ālām-āra-ye Nāderī*, vol. 1, pp. 163-5, *Zabūre-Āle-Dāūd*, p. 113, *Majma‘ al-tawārīkh*, p. 116.

- (45) *Zabūre-Āle-Dāūd*, p. 113, *Majma‘ al-tawārīkh*, p. 116.

- (46) なお、エスファハーンのシシエト・シシエト宮に噴泉が据え付けられていた (羽田正編著『ニシャルダン『エスファハーン誌』研究』一三三—一三四頁)。

- (47) ‘*Ālām-āra-ye Nāderī*, vol. 1, p. 203.

- (48) ‘*Ālām-āra-ye Nāderī*, vol. 1, p. 165.

- (49) ‘Ojāredī, *Farhang-e Khorrāsān*, vol. 1, p. 211. なお、旧

メイダーンという地名の記述は ‘*Anzābīnehād*, et al. (eds.), *Bīst vaqāme az Khorrāsān*, p. 220 に見える。

- (50) サファヴィー朝後期のサフイー・コリー・シヤフ Sa‘īf Qolī Beyg の一六六五年 (一〇七六AH年) のワクフ文書において、本文中で言及した同バークの前庭の存在が示されている。このワクフについては文書の要約が ‘*Āsār al-Razavīye*, pp. 169-170 に掲載されており、拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザイ廟のワクフ」一三三—一三三頁でも言及している。

- (51) *Almadshāhī*, p. 153.

- (52) この前庭と云う説明書は *Majma‘ al-tawārīkh*, p. 53, *Majma‘ al-tawārīkh*, p. 132 に見える。 *Zabūre-Āle-Dāūd*, p. 122 では「吉兆なるトウラト・ハーンの庭とあるメイターン」と説明されている。この前庭 *jelowkhān/jelowkhāne* とはインドの庭園・宮廷建築に良くみられるものである。具体例を一つ示せば、一八世紀北インドのアフドの政権下の宮廷の建築複合体にも存在し、本文中で後述するイラン地域のメイターンと同様の役割を果たしていたことが窺える (Keshani, Hussein, “Theatres of power and piety: Architecture and court culture in Awadh, India,” in Albrecht Fuess and Jan-Peter Hartung (eds.), *Court cultures in Muslim world: Seventh to nineteenth centuries*, London and New York: Routledge, 2011, pp. 445-471)。

- (53) 新メイダーンと云う名称は *Anzābīnehād*, et al. (eds.), *Bīst vaqāme az Khorrāsān*, p. 219 に見える。

- (54) インド遠征で勝利した一七三九年(一一五一A.H.年)に、マシユハドでは市内を装飾し、演奏や歌唱、踊りでその戦勝を祝うが、その際にプハラからやってきたハッジ・エブラーヒーム Hajj Ebrahīm なる綱渡り芸人 *ṭishmān-bāz* がアーリー・ガーブーの上でナグシエ・シヤハーンのメイダーンの旗頭 *qaṭāk* の下、楽隊演奏所の上に綱を張って、その綱の上を渡ってみせたという記述がある (*‘Ālām-ānā-ye Nāderī*, vol. 2, pp. 771-772)。よってこの記述中に現れる建物はメイダーンに面した形で存在したと考えられる。なお、サファヴィー朝期のエスファハーンでは、メイダーンの北側にあったバーザールの入口のところに楽隊が演奏を行う場所があったという (Lambton, A. K. S., “Nakkara-khana”, in P. Beaman et al. (eds.), *Encyclopaedia of Islam*, second edition, vol. 7, 1993, pp. 927-930)。
- (55) Babae, Susan, *Isfahan and its palaces: Statecraft, shi’ism and the architecture of civility in early modern Iran*, Edinburgh: Edinburgh university press, 2009, pp. 35-40, 47-55. 羽田正「メイダーンとバーゲーシヤー・マッバースの都市計画再考」『橋女子大学研究紀要』一四号、一九八七年、一八八―一九四頁。
- (56) *Zabūr-e Āle-Dawūd*, p. 122. *Majma’ al-tawārīkh*, p. 132.
- (57) *Ajmadshāhī*, p. 153 にメイダーンに置かれていたと思しき大砲 *tūp* を外部へ引出す出口の記述がある。
- (58) *Zabūr-e Āle-Dawūd*, p. 132. *Majma’ al-tawārīkh*, p. 142. エーンフ・アリー・ハーン Yūsuf ‘Alī Khān をはじめとしたシヤラーエル部族の領袖らがこのメイダーン *meydān-e shāhī* で殺害される。但し *Ajmadshāhī*, p. 266 ではこの人物らの最後は首刑に処された上でトルシーズ *Torshiz* 方面に送られたと記述されている。なお、この事件は *Ajmadshāhī*, p. 266 の記述に従えば一七五二―一七五三年(一一六六A.H.年)のことと考えられる。
- (59) ナーテル期の戦勝記念のためのこのメイダーンでの曲芸披露の例については、本稿註(54)を参照のこと。
- (60) メイダーンについては、その周囲が店舗で埋め尽くされるケースが見られ、ガーシヤール朝期エスファハーンの前メイダーン(坂本勉「一九世紀エスファハーンの都市構成とメイダーン」(Ⅲ)『史学』五一巻三号、一九八一年、六四―六五頁)、さらにはテハランのバーザールのメイダーン(近藤信彰「一九世紀テハランの大バーザール: 発展、構成、所有関係」『上智アジア学』二五号、二〇〇七年、一六六頁)の事例の指摘がある。このメイダーンも周囲が店舗で埋め尽くされていた可能性もあろう。
- (61) メイダーンの機能については、坂本勉「一九世紀エスファハーン」の都市構成とメイダーン(Ⅲ)「六〇―六七、七三―七四頁を参考にした。
- (62) サファヴィー朝後期エスファハーンの王宮地区にも、「厨房門」が存在し、その一帯には厨房や食料の貯蔵庫があったとされる (Blake, S. P., *Half the world: The social architecture of Safavid Isfahan, 1590-1722*, Costa Mesa: Mazda Publishers, 1999, p. 73)。
- (63) *Ajmadshāhī*, p. 151.

- (64) *‘Ālām-ārā’ye Nāderī*, vol. 3, p. 982. ロックार्ट氏はこの政策を先行するサファヴィー朝の宗教政策への否定であること評する (Lockhart, *Nadir Shah: A Critical Study Based Mainly upon Contemporary Sources*, pp. 278-279)。
- (65) Tucker, *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, p. 71.
- (66) Astarābādī, Mirzā Mehdi Khān, *Jahāngshā’-ye Nāderī*, Seyyed ‘Abd Allāh Anvār (ed.), Tehrān: Anjoman-e āsār va molākeh-e farhangī, 1377 kh., p. 62, *‘Ālām-ārā’ye Nāderī*, vol. 1, p. 203.
- (67) *‘Ālām-ārā’ye Nāderī*, vol. 1, p. 169.
- (68) ヲラートの城塞の建設自体はクルト (カルト) 朝期のことと言われ (O’Kane, Bernard, *Timurid Architecture in Khorasan*, Costa Mesa, Calif.: Mazda Publishers, 1987, pp. 115-118)。
- (69) *‘Ālām-ārā’ye Nāderī*, vol. 1, p. 200. なお、ワタフ文書にみえる八角形型の大石であったことである (Anzābānehād, et al. (eds.), *Bist vaqhnāme az Khorāsān*, p. 222)。
- (70) 同廟の水場への水供給に関しては、ワタフ文書ではトログ (村) の水 *āb-e Torog* を用いるようにとの記載がある。本文中で先に触れた *‘Ālām-ārā’ye Nāderī* にあるコレスターン村からの水は廟の溜池に流されたところである。水場用の水利設備は別途整備されたと推測される (Anzābānehād, et al. (eds.), *Bist vaqhnāme az Khorāsān*, p. 223)。

- (71) *‘Ālām-ārā’ye Nāderī*, vol. 2, p. 826.
- (72) Anzābānehād, et al. (eds.), *Bist vaqhnāme az Khorāsān*, pp. 224-225, 227. ワタフ文書にその名が見える埋葬者の筆頭に挙げられているバーバー・アリー・ベグは、ナーデルの活動開始期にマビーヴァルト Abward の支配者であった人物で、ナーデルは彼のことで砲兵長 *tofangchī-āqāsī* に任じられて以降、軍事的な名声を高めていくことになる。彼は一七三三年 (一一二九 A.H.) のアフガン軍との戦闘で亡くなるが、その遺体はレザール廟に運ばれた。また、彼の娘二名がナーデルに嫁ぐことになる (*‘Ālām-ārā’ye Nāderī*, vol. 1, p. 12, 14, *Jahāngshā’-ye Nāderī*, p. 28)。) の人物の他に埋葬されていた五名 (タマーン・ハーンム、*Tā’an Khānom*、サフイー・クリー・ベグ Saif Qoif Beyg、モルタザー・クリー・ベグ Mortazā Qoif Beyg、ハニエー・ジェ・ハーンム Khādīje Khānom、シヤームルー・ハーンム Shāmlū Khānom) の経歴等については管見の限り不明である。なお、廟の建材については、*‘Ālām-ārā’ye Nāderī*, vol. 1, p. 204 に記述がある。
- (73) *‘Ālām-ārā’ye Nāderī*, vol. 1, p. 202.
- (74) ナーデルはティムールを模倣した多くの活動を展開することでも自身の支配の正統性の確保に努めたと言われる。その具体例として、オスマン朝、ムガル朝、中央アジアとの外交とこれらの諸勢力に対する遠征活動の模倣 (Tucker, *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, pp. 72-74)。

- (75) 完成した年については、*‘Ālām-āra-ye Nāderī*, p. 204 に記載がある。
- (76) 同廟の被葬者や天蓋の数については、ガーシヤール朝期の史料 Nūrī, Moḥammad Taqī, *Ashraf al-tawārīkh*, vol. 1, Sūsān Asfīf (ed.), Tehrān: Mihrās-e maktūb, p. 296 に同廟が破壊された際の記述があるが、その中に見えぬ。
- (77) 建物の構成や敷地内の水場の存在、庭師への給金の支払うことについてはワクフ文書に記述がある (Anzābīnehād, et al. (eds.), *Bist vaqfāme az Khorāsān*, pp. 224–225, 227)。
- (78) *‘Ālām-āra-ye Nāderī*, vol. 2, p. 799, 827.
- (79) *Zabūre-Āle-Dāwūd*, p. 114, *Mojmal al-tawārīkh*, p. 47, *Majma‘ al-tawārīkh*, p. 119.
- (80) マラーゲ産の大理石製の門の設置については、廟の破壊後にマシユハドを訪れたフレイザー Fraser による廟の外観を回想した記述に見える (Fraser, J., *Narrative of a Journey into Khorasan in the years 1821 and 1822*, London: Longman, Hurst, Rees, Orme, Brown, and Green, 1825, repr. Delhi, New York: Oxford University Press, 1984, p. 462)。
- (81) なお、同ワクフのうち、ナーデル廟を受益対象とした箇所については、Mokhlesi, ‘Mashhad-e pāytakht-e Afshāriyān’, p. 629 にも言及があり、同文書に基づく建物の構造の推定も試みているが、墓廟建築の特徴や建設の意図にまで踏み込んだ考察を行っていない。
- (82) 前近代におけるスンナ派、シーア派王朝君主の埋葬・墓廟の違いについては、羽田正「スルタン・スレイマーンとシャー・アッバースームスリム君主の墓廟観」『歴史と地理 世界史の研究』一四七号、一九九一年、一一二頁を参照のこと。
- (83) こゝで言及したサファヴィー朝期を除くセルジューク朝以降のイラン地域とインドの廟の特徴については、ラッゲルズ、フェアチャイルド『図説 イスラーム庭園』榊屋友子(監修)、木村高子(訳)、原書房、二〇一二年、一二七—一二六頁を参考にした。
- (84) タブリーズに建設されたガザン・ハン廟を含む宗教慈善複合体はガザニーヤと呼ばれ、マドラサ、天文台、浴場、病院等がワクフにより運営され、慈善面での一〇〇名の孤児へのコーラン教育や困窮者への衣服、靴の支給、朝晩の貧者、住民への食事の配布が定められていたという。また、スルターニエに建設されたオルジェイト廟にも同様の慈善施設が建設されている (羽田正「牧地都市と墓廟都市」三一—八頁)。
- (85) Tucker, *Nadir Shah’s Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, p. 76.
- (86) 同王朝期におけるワクフによる商業インフラの整備に関しては、本文中に既出のサフイー・ゴリー・ベグ、アッバース・ゴリー・ハーンが多数の店舗等をワクフ財として設定していたことが確認できる (拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザイ廟のワクフ」一一二—一三三頁)。
- (87) ワクフ財、ワクフ管財人職の継承法に関しては、

Anzābnehād, et al. (eds.), *Bist vaqānime az Khvārsān*, pp. 218-222, 225-226 に記載がある。

(88) 翻刻は SRAHY と表記され、校訂者は判読不明としてる。Asār al-Razaviye, p. 160 では冒頭の文字が se に見えるため、その後の文字 H を jim の点が落ちたものと解し、鞍製造業 sarrij として仮に解釈した。

(89) 羽田正「メイスターンとバーン」一九〇頁。Blake, *Half the world: The social architecture of Safavid Isfahan, 1590-1722*, p. 114.

(90) サファヴィー朝期におけるコーヒーハウスの役割に關して Mathee, Rudi, "Coffee in Safavid Iran: commerce and consumption", in *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 37-1, 1994, pp. 20-27 を参考にした。なお、マナー氏によれば、コーヒーハウスにおける男娼の存在といった風紀の乱れは、マッバース二世期の宰相ハリフエ・スルターン Khalife Soliman 期における政策の転換により一掃されたと言う。この点に関してはシャルダンの記述も参考になる(シャルダン、J.: 『ペルシア見聞記』岡田直次訳注、平凡社東洋文庫、一九九七年、二二二頁)。

(91) シヤー・アッバースはコーヒーハウスによく通っており、一六一九年(一〇二九AH年)にトルコ、インド、ロシア等の使節をコーヒーハウスに呼び出し、宴席を設けたこともあったという(Mathee, "Coffee in Safavid Iran: commerce and consumption", p. 17, Āle Dawūd, *Alt. "COFFEEHOUSE" in Ehsan Yarshater*. (ed.), *Encyc-*

lopedia Iranica, vol. 4, 2000, pp. 1-4)。

(92) Mathee, "Coffee in Safavid Iran: commerce and consumption", p. 9.

(93) マクチェスニー氏は先述の "Maazkir al-ashab" の記述を元に、当時マシユハドに二軒のコーヒーハウスが存在したことを指摘する (McCheney, R. D., "Barrier of Herododoxy"? : Rethinking the Ties between Iran and Central Asia in the Seventeenth Century", pp. 243-244.)。また、ワクフ財としてのコーヒーハウスについては、註(50)で言及したサフイー・ゴリー・ベグのワクフ文書にて、チャハール・パークの前庭のコーヒーハウスがワクフ財として設定されている(拙稿「サファヴィー朝後期におけるヘマーム・レザイ廟のワクフ」二二二―二二頁)。

(94) 文書中では「コーヒーハウスと店舗群 qahvehkhāne va dakākin」という形で記載されている (Anzābnehād, et al. (eds.), *Bist vaqānime az Khvārsān*, p. 222)。なお、シャルダンは前王朝のコーヒーハウスの内部空間につき広々とつくられた大サロンとなっており、泉水が置かれてその周りに石か木の壇での廊下のようなものをめぐらせていて、そこに人が座れるようになっていた、と伝える(シャルダン、J.: 『ペルシア見聞記』岡田直次訳注、二二二頁)。このように、コーヒーハウスはその店舗数も独特な様相を持っていた。

(95) なお、翻刻では旧メイスターンの店舗数の合計が二九軒となっているが、実際に記載されている店舗数を数えると二八軒にしかならなく (Anzābnehād, et al. (eds.), *Bist*

vaghāne az Khorāsān, pp. 220–221)。Ketābche-ye *Monaqāte Astān-e Qods-e Razavi*, Ketābkhāne-ye Astān-e Qods-e Razavi, MS. No. 8557, fol. 45–54. 以下、翻刻は一軒となっている搾油業が二軒 do bāb と記載されているため、それぞれに従った。

- (96) このバーザールとチャハール・スークは現存せず、正確な場所是不明である (Olāređi, *Farahang-e Khorāsān*, vol. 1, p. 211)。レザー裔サインエドトに関する文書の写しを多数収録する史料 *Shajare-ye tāybe* の「ヤ」一七十七年 (一一二九AH) の賃貸文書の中に「チャハール・スークに近接するメイターンのバーザール」という表現が見える (Razavi, Mirzā Moḥammad Bāger, *Shajare-ye tāybe: dar anṣab-e selsele-ye sādāt-e ‘alan-ye Razavi-ye Moḥammad Taqī Modarres Razavi and Mehdi Seyyedī* (eds.), Mashhad: Ahang-e qalam, 1384Kh., p. 275) など。
- (97) こうした特定の業種の名称を冠したバーザールでは、確かにその業種の店舗の集中が見られたが、その業種の店舗が必ずしも全体の過半数を占めていたわけではない場合があることも留意する必要がある (近藤信彰「テヘランの大バーザール」発展・構成・所有関係」一七四頁)。このバーザールの店舗の詳細までは確認できないが、恐らくはその名がついている業種の店舗が多数存在していたと考えられる。

(98) ガーシヤール朝期のエスファハーンにおいて旧メイダーンが商業面での重要性を担っていた点については、坂

本勉「一九世紀イェスファハーンの都市構成とメイターン (III)」六一―七二頁。

- (96) ショーヒー・マンジュブン George Thompson なる商人が一七四一年にマンジュハドを訪れており、その際の記録をハンウエイが自身の著書に載せている (Hanway, Jonas, *An Historical Account of the British Trade over the Caspian Sea*, vol. 1. London: Sold by Mr. Doddsley, 1753, p. 356)。
- (100) Perry, John R., “Forced Migration in Iran during the Seventeenth and Eighteenth Centuries”, in *Iranian Studies*, 8–4, 1975, pp. 208–209.

- (101) マンジュハドのユダヤ教徒については、ナーデルがガズヴェーンから四〇名の名家を移住させた旨指摘されるが、口承伝承を典拠としている (Sabini, Haidah, “Two wars, two cities and two religions: The Jews of Mashhad and Herat wars”, in Hounnan M. Sarshar (ed.), *The Jews of Iran: The History, Religion and Culture of a Community in the Islamic World*, London and New York: I. B. Tauris, 2014, p. 76)。管見の限りペルシア語等の同時代史料には当時の彼らについての言及が確認できないため、本稿では考察の対象から外した。なお、マシユハドのユダヤ教徒共同体は後のガーシヤール朝期一八三九年三月二十五日 (一一二五五年一月一〇日AH (マージュシュラー)) にユダヤ教徒の子供が起したムスリムへの冒流行為によって被害と略奪の対象となり、生き残った人々は強制改宗の憂き目にあうという事件が起される (Heddyat, Reza Qoli Khan, *Tārīkh-e rouzāt al-sāfā-ye Nāserī*, Jamshīd Kiyānfar

(ed.), *Tehrān: Asāfir*, vol. 14, pp. 8262-63)。

- (102) 同王朝期のイラン地域各地におけるアルメニア人共同体の状況については Chougassian, Vazhen S., *The Emergence of the Armenian Diocese of New Julfa in the Seventeenth Century*, Atlanta: Scholars Press, 1998, pp. 33-47 を参照した。

- (103) *Ālm-nāra-ye Nāderī*, vol. 3, p. 1076, *Zohdat al-tawārīkh*, p. 165, Artin Efendi, Tanburi, *Tahmas Kulu Han in Tevarīhi*, Esat Uras (ed.), Ankara: Turk Tarih Kurumu basımevi, 1942, p. 36. なお、エスファハーンを手本にしたことに関して記述する *Zohdat al-tawārīkh* の校訂の該当箇所は「De vaz-e kholafā-e Efstāhān」になっているが、*khōlafā* は Jolā の誤りと思われるため、訂正した上で解釈した。

- (104) タッカー氏もこのアルメニア人の移住につき、エスファハーンの新ジヨルファアにおける居住区形成との類似性を指摘してゐる (Tucker, *Nadīr Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, p. 68)。但し、筆者は「」の移住政策について「」についてはバーグの件等も含め、ナーデルがエスファハーンを範とした形でマシヌハド全体の整備を進める際の都市計画のひとつに位置つけてゐる。

(105) *Ālm-nāra-ye Nāderī*, vol. 3, pp. 1076-77.

- (106) なお、ガーシヤール朝期のレザー廟ワクフ管財人シールザー・ファズロッラー Mirza Fazlollāh (在職一八五四—一五六六年) の時代に、マシヌハドの隊商宿に在るいかがわしい女性、浴場にいる髭のない少年の追放令が出され

ている。この命令は、この頃にも盛んに行われていたであろう売春を排除し、都市の綱紀を正すために発布されたものと思われる (Basijāni, Nowruz Ali, *Ferāous al-tawārīkh*, Tehrān: Ketābkhāne, māze va markaz-e asnāde majlese showrāye eslāmi, 1390kh., p. 60)。

- (107) ザリーフ移設については *Zābir-e Āle Dāvūd*, p. 114, *Mojmal al-tawārīkh*, p. 47, *Mojmal al-tawārīkh*, p. 119 を参照した。ザリーフの価値は後者の当該部分に記述がある。なお、ナーデル没後の混乱については、小牧昌平「一八世紀中期のホラーサーン—ツェッラーニー朝とナーデル・シヤール没後のアフシヤール朝—」『東洋史研究』五六巻二号、一九九七年、三六—九〇頁に詳した。

- (108) アリー・シヤールは後に破壊された自身の廟を受益対象としたワクフを行っており、一七四八年 (一一六一AH. 年) のワクフ文書がホラーサーンのワクフ慈善庁に保管されている。このワクフについては Seyyedī, *Sinā-ye tārikhī-fahangī-ye shahr-e Mashhad*, pp. 63, 125-126 を参照した。

- (109) ナーデル廟の破壊については、先述の通り *Ashraf al-tawārīkh*, vol. 1, p. 296 に記事がある。なお、同廟の破壊はカーズン卿の著書の記述に基づきアーガー・モハンマド・ハーン期の出来事であると言われているが、*Ashraf al-tawārīkh* の校訂者であるスーサン・アスィーリー氏は本史料のこの部分の記述の方がより正確であると脚注で述べている (*Ashraf al-tawārīkh*, pp. 486-97)。

- (110) ホセイニー氏によれば、バーグ一帯の荒廃後に同名の

街区 (mahalle-ye Chahār bāgh) が置かれるも、その名もマッシュハドの区画整理で後に使われなくなり、現在はパークがあった場所にある通りの名前として僅かに痕跡を残すのみである (Hoseyni, "Chahār bāgh-e Mashhad-e Tinnūt dar āyine-ye tārikh", p. 84)。